

Episode1 姉と弟

今日は姉ちゃんが家にいた。

ここ最近の仕事でも休日出勤があって休む暇がないとぼやいていたのだ。俺も大変だなと思っていた。俺は二十歳で、姉は二十三歳だった。俺より三つ上の姉ちゃんはとてもいい姉ちゃんだった。

どういいのかというと、俺の面倒をよく見てくれる優しい姉ちゃんなのだ。本来なら親が言うようなことを口うるさく言ってくる。そういうときは、少しウザいと思うこともあるが、俺のことを心配してのことなので、そんなに嫌ではなかった。むしろ父さんや母さんに言われるよりは、姉ち

やんに言われた方がいいかも知れない。

俺自身は姉ちゃんと仲がいいと思っているが、姉ちゃんがどう思っているかは知らない。きっと出来の悪い弟だと思っているだろう。

姉ちゃんの見た目はそんなに綺麗というほどでもないが、決してブスではないと思っている。スタイルはスリム体型ではなく、ぽっちゃりの部類にギリ入る感じではないだろうか？ でもデブではない。

そしてなんといっても姉ちゃんはおっぱいが大きいのだ。一緒に住んでいて、ついついその胸に目が行ってしまう。なるべくバレないようにしているのだが、たぶん本人は気づいているに違いない。ブラのサイズのことには俺にはよくわからないが、Dか、それ以上だと思う。

俺は常日頃から、そのおっぱいを揉んでみたいと思っていた。でも、それはなかなか実行できなかった。当たり前だ。そんなに簡単なことではな

い。いきなりおっぱいに触ったらぶっ飛ばされてしまう。

何かいい方法はないかと日々思案していた。そして思いついたのだ。それはユーチューブを見ていて、「これならいけるかも」と思う方法だった。今日は休みだが、両親は二人でドライブに出かけて家にはいなかった。きつと夕方までは戻らないだろう。いつもそうだった。うちの親は仲が良くて、よく二人だけで出かけたり、旅行に行ったりしていた。

そんなわけで今、家にいるのは俺と姉ちゃんだけだ。俺はその作戦を結構するために居間にいる姉ちゃんに声をかけた。

ちようど姉ちゃんソファに座って、爪を切っているところだった。

「あれ？　姉ちゃん今日は出かけないの？」

「うん、別に用事ないし。あんたは出かけないの？」

「俺も行くところないし」

「バイトは？」

「今日は休みだよ」

まずはどうでもいい日常会話を挟む。そんな話をしたあと、俺は言った。

「ねえ、姉ちゃん、一緒に風呂入ろうか？」

チャラい感じで俺は言った。すると姉ちゃんは一瞬硬直した。

「どうしたの？ 急に」

笑みを含んだ顔で姉ちゃんは驚いた。目を見開いている。

「たまにはいいかなと思ってさ」

「なによそれ、だってあんた、前に姉ちゃんと一緒に入ろうって言ったとき、嫌だって言ってたじゃん」

「あのときは恥ずかしかったからさ」

「今は恥ずかしくないの？」

「だってあれ中学んときだよ。おれも成長したからさ」